

## エネルギーレジリエンスの定量評価に向けた専門家委員会

### 第1回会合 議事概要

日 時：令和2年2月6日（木）10：00～12：15

場 所：経済産業省本館17階 第1～2共用会議室

欠席者：鈴木委員、中原委員、守谷委員

1. 事務局より委員会の目的・運営について説明。運営について委員等から異論なく、資料3の案の通りとなった。

2. 事務局よりエネルギーレジリエンスの概念整理、国際的な議論動向について説明。

3. 委員からの主な意見

○委員会の取組みについて

- 広域災害が発生した際に経済活動を途絶えさせないために何ができるのか。平時の環境性能、有事の際の防災向上に寄与する取組みの経験を、定量的な評価の仕組みの構築にも役立てていきたい。
- レジリエンスの観点から、多様化、リスク分散という考え方が非常に重要。また、レジリエンス対策といっても、同じ取組みが、リスク想定に応じて異なる性格を持つ場合もあるので丁寧に議論しながら考えていきたい。
- （自然災害の被害が甚大化する中）今までコストだと思われていたものについて、投資を呼び込んでいくことは非常に重要。ESG投資も拡大する中、レジリエンス向上というS（社会）の価値としても重要であり、投資家に発信できるような強いものを作っていきたい。

○「エネルギーレジリエンス」の定義について

- 有事（災害時の対応）と平時（有事に対応するための事前対応）の両方をみるという説明は、エネルギー事業者と平時・有事の捉え方が異なる印象。エネルギー事業者は何も無い時に如何に着実にエネルギーを届けるかに日々努めており、当然有事も想定するが、安定供給は平時・有事関係なく日常の取組である。
- 災害というより各種多様化しているリスクと捉えては如何か。
- 通常時においてもかかるリスクは増えており、そもそもレジリエンス対策の必要性は、平常時の持続可能な成長があつてこそ。自然災害に対する強靱性より広い解釈で検討しては如何か。

#### ○評価の視点について

- そもそも定量評価を供給側と需要側のどちらに帰属させるのか。強靱化となれば供給側の話になり、BCPやサプライチェーンとなれば需要家側の話となる。最近では自然災害がニューノーマルになっており全く予測できないなか、誰の視点で定量評価をやっていくのが一番良いのか、しっかりと検討したい。
- 4つポイントがある。1点目はレジリエンスを考える単位で、個々の生活者・企業（点）、サプライチェーン（線）、エリア（面）のレジリエンスをどう考えていくか。特にエリアの観点からは、地域の防災拠点という地域貢献を考えるが、企業の自助努力を超える範囲でやる場合にはそれをどう評価していくのかは重要。2点目は、供給側と需要側である。顧客の声も踏まえてレジリエンスはどう受け止められているのかという点が大事。3点目はエリアである。エリアも2つに分かれ、都市部・再開発地域でのレジリエンスの取組は多々やっているが人口問題等を抱える地方も重要。4点目は評価である。エネルギーの直接的なメリットやCO2も当然大事だが、間接的なメリットとしてのノン・エナジー・ベネフィットをどう定量化するか、が重要。

#### 「エネルギーレジリエンス」の国際展開について

- 自然災害に限らずサイバーリスク等に対しても先端技術でどのように対応していくのか、それによりファイナンス側のリスクを下げ、若しくは、早期回復によりダメージを減らせるのではないかと着目している。
- 今回の取組は日本の強みを海外に広くアピールするチャンスでもある一方、そのような取組・指標・評価が先ずきちんと日本で広まりうまく回っていることを示しながら国際舞台に出ていくことが必要。
- 同様の議論が、APEC等で検討が進んでいるなかで、どのように位置づけていけるのか。世界的に受け入れられるのか・認められるのかというゴールを見据えながら、議論していく必要がある。

(以上)